

盛岡地域版



銀河のしずく

Ginga no Shizuku

栽培マニュアル(Ver.1.2)

今年産の目標や重点取組事項 記入欄 (自由にご記入ください)

令和7年2月

JA 新いわて

盛岡農業改良普及センター

< はじめに～本マニュアルについて >

本マニュアルは、岩手県「銀河のしずく」栽培マニュアルを基に、特に取り組んでほしい内容を記載しています。

基本技術は、岩手県のマニュアルを引き続き遵守してください。

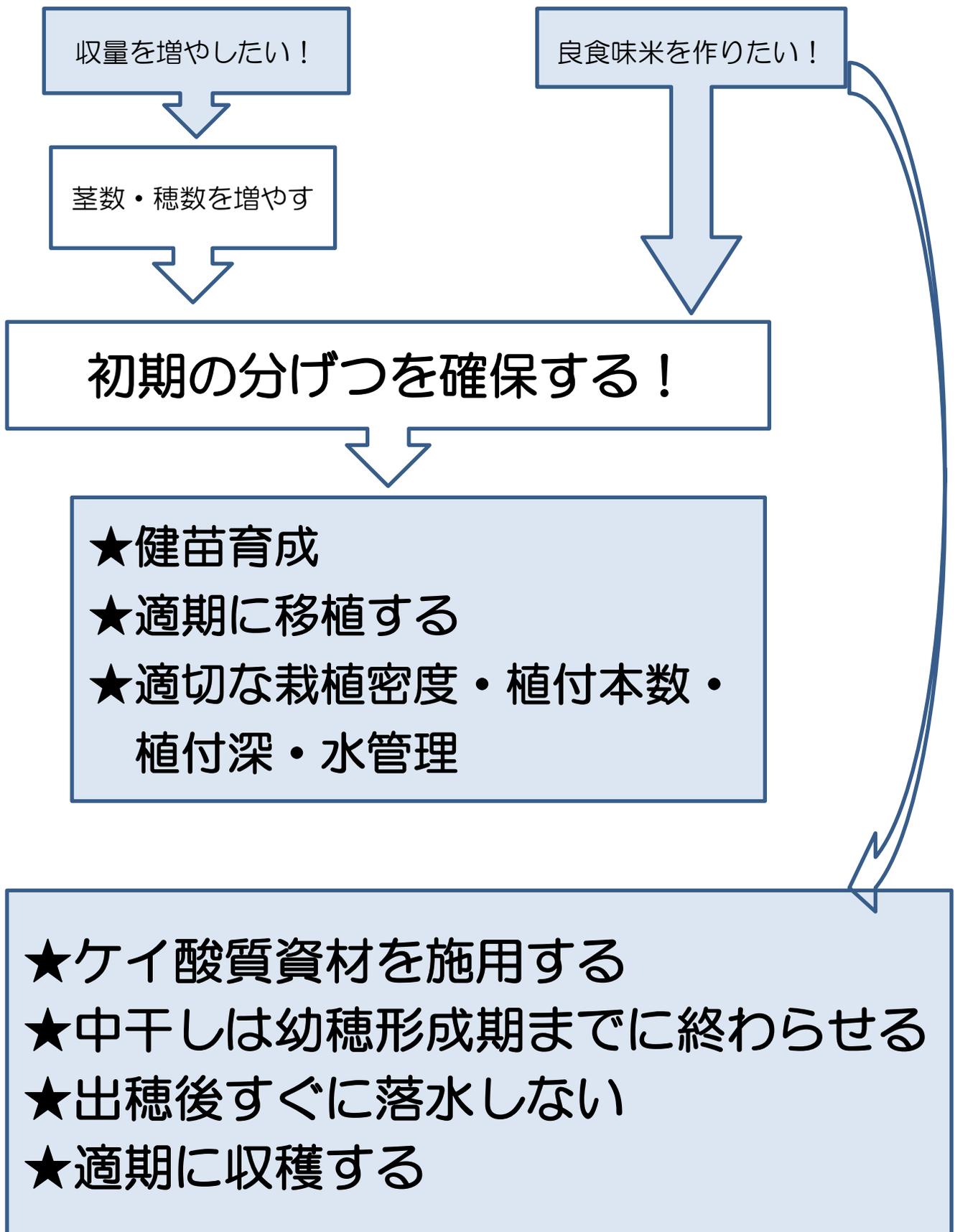
また、重点事項を実施したか自己点検してもらうために、チェック欄を記載しました。すべての項目にチェックが入るように取り組んでください。

今後、新しい知見を加えて更新していきます。

< 目 次 >

	頁
1 収量・品質を向上させるための栽培のポイント	2
2 健苗育成	3
3 春耕起	4
4 代かき	4
5 基肥	5
6 適期移植	5
7 栽植密度・植付本数・植付深	5
8 雑草対策	6
9 移植後の水管理	6
10 生育ステージの見方	8
11 追肥	10
12 病虫害防除	10
13 適期刈取	12
14 乾燥	12
15 秋耕起・土づくり	12
16 栽培管理記録簿	13
17 事故の防止	13

1 収量・品質を向上させるためのポイント



2 健苗育成

チェック

水温を確認してから浸種を開始しました

浸種はじめての水温が特に重要
温めた水に浸種すること

(1) 浸種～催芽

- 12～15℃に温めた水に浸種する。
- 種子消毒を行う場合は、薬液の温度も 12～15℃に温める。
⇒漬け始め（浸種 1 日目）の水温が低いと出芽不揃いの原因となる
- 催芽の温度は 30℃を厳守する（細菌病対策）
機械の設定だけではなく、温度計で温度を確認する。

育苗計画に合わせた播種量にしました

播種量と育苗日数は苗質に影響します。
自分の育苗計画に合った播種量にします。

(2) 播種

- 育苗日数に合わせた播種量とする

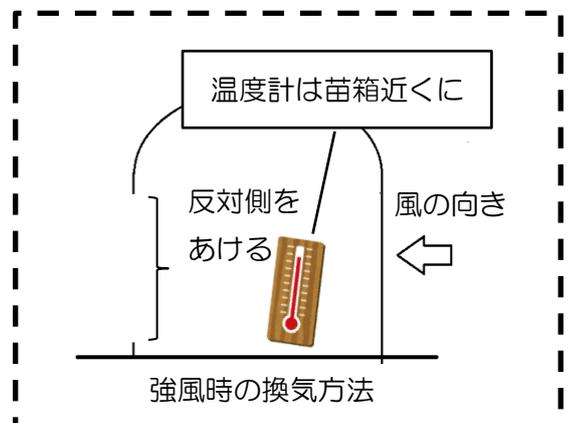
種類	播種量 (g/箱, 乾糶)	育苗日数 (日)	葉 齢 (葉)	草 丈 (cm)	乾物重 (g/100本)
稚 苗	150～180	20～25	2.0～2.5	12～14	1.0～1.5
中 苗	100～120	30～35	3.5～4.0	13～15	2.0～2.5

育苗期間中、こまめに温度管理をしました

苗が徒長しやすいので、
ハウス内の温度管理に注意！

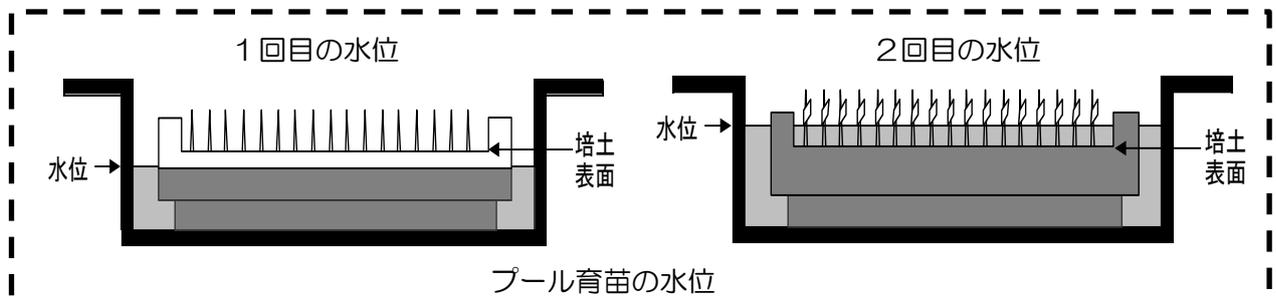
(3) 温度管理

- 緑化期以降 25℃以上とならないよう、温度計を設置して、こまめに温度管理を行う。
- 高温・強風時は、苗に直接風が当たらないように換気を行う（右図）。
- プール育苗の場合、水温を日中 25℃以下、夜間は 10℃以上となるように管理する。



(3) かん水

- ベタ置き育苗の場合、過かん水にならないよう管理する。
- プール育苗の場合、1回目の入水は緑化終了2～3日以内に行う。2回目の入水は2葉目が出始めた頃に行う。



(4) 病害

- 細菌病や苗立枯病が発病したら、速やかにハウス外で処分する。

3 春耕起

作土深 15cm を目標に耕起しました

- 低速で走行し、ロータリの回転を遅くすると深耕しやすい。

作土が深いと肥料持ちがよく、根張りもよくなります。

4 代かき

少なめの水で代かきをしました

- 田面が7～8割見える状態から代かきをする
- 田面に凹凸がある場合は、ハローの回転を遅くし、低い部分に土を引いて均平する。

少な目の水で代かきをすると残渣（稲わらや肥料殻）の浮き上がりを抑えることができます。

5 基肥

基肥は適正量施肥しました

- 基肥は代かきの直前に施用する。
- 基肥+追肥体系の場合

10a 当たり窒素 6kg

(例) 新みのり 1号：10a 当たり 50 kg、新みのり 2号：10a 当たり 40 kg

- 基肥一発肥料を利用した体系の場合

10a 当たり窒素 6 kg 基本的に追肥は行わない

(例) 新みのり一発 10a 当たり 40 kg

水稻一発 N25 10a 当たり 24kg

※水稻一発 N25 は緩効性の窒素が早期溶出するため、10a 当たり窒素 6kg (10a 当たり 30kg) 施用可能

多肥栽培は玄米タンパク質含有率の上昇につながるので注意

6 適期移植

適期に移植しました

- 田植え機の植付爪が減っていないか確認する。
- 代かきから5日以内に移植する。
- 移植は5月 15~25 日の間に行う。
- 移植はできるだけ暖かい日に行う。
- 低温時は、移植を見合わせ、気温が回復するのを待って移植する。

適期より早いと高温登熟で品質低下、遅いと登熟不足につながります

7 栽植密度・植付本数・植付深

栽植密度・植付本数・植付深を守りました

- 栽植密度 60~70 株/坪
- 植付本数 4~5本/株
- 植付深 稚苗は2~3cm、中苗は3~4cm

適正な栽植密度・植付本数・植付深で初期生育を確保!

8 雑草対策

(1) 「銀河のしずく」を初めて作付けするほ場

異品種混入防止のためです

初期除草剤＋初中期一発処理剤体系

- 田植え直後、プレチラクロールを含む初期除草剤を使用する。
→ 「こぼれ粃」から発生する稲の防除に有効
- ※ プレチラクロール含有除草剤の例
エリジャン乳剤、ソルネット 1 キロ粒剤、農将軍フロアブル
- 初中期一発処理剤を初期剤散布後 10 日頃に散布する。

(2) 「銀河のしずく」作付け 2 年目以降のほ場

- 初期剤は不要。
- 初中期一発剤を早めに散布する。

9 移植後の水管理

生育・天候に応じた水管理をしました

適切な水管理は稲の生育を促します

(1) 移植直後の水管理

- 活着するまで（移植 3～4 日）は、葉が 2～3 cm 出る程度の深水にする。

(2) 活着後の水管理

- 低温でも日照がある日は、2～3 cm の浅水で管理をする。

(3) 中干し

莖数 20～25 本/株を確保しました

莖数が多すぎると籾数も増えるため、十分な登熟を阻害します

- 時期：莖数が 20～25 本/株になったら実施する（6 月 25 日ころから開始）。
- 期間：幼穂形成期前に中干しを終える。
（7 月 10 日までに終える）
- 中干しの程度：田面に小さな亀裂が生じ、田面を軽く踏んで足跡がつく。
- 溝切りを実施する。
- 中干し後は間断かんがいとす。

(4) 幼穂形成期以降の水管理

- 幼穂形成期は水深4～6cmとし、徐々に水深10cmまで水位を上げる。
- 低温が予想される場合は、減数分裂期前後に10cm以上の水深を確保する。
- 低温の心配がない場合は、減数分裂期から出穂期まで間断かんがいを行う。

(5) 出穂期

- 出穂期は水深5cmとし、その後間断かんがいを行う。

出穂期は稲の生育速度が速く、水が必要です

(6) 登熟期

- 登熟期の入水は夜間に行い、土壌を常に湿潤状態（足跡に水がたまる程度の状態）に保つ。

※この管理を飽水管理という。

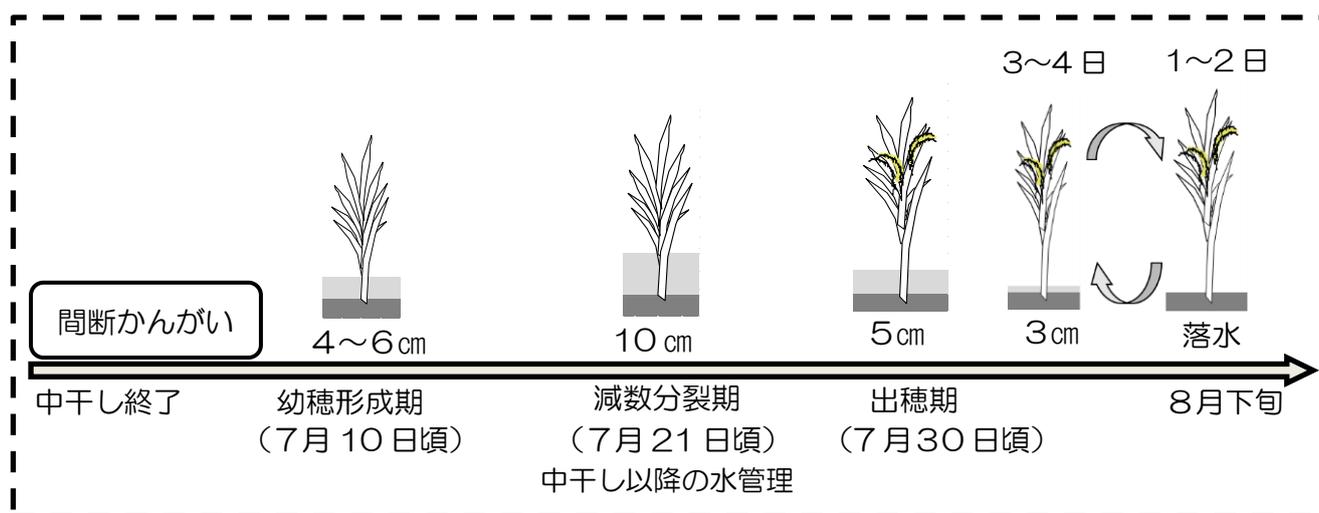


湿潤状態の土壌

（足跡に水が少したまる程度の状態）

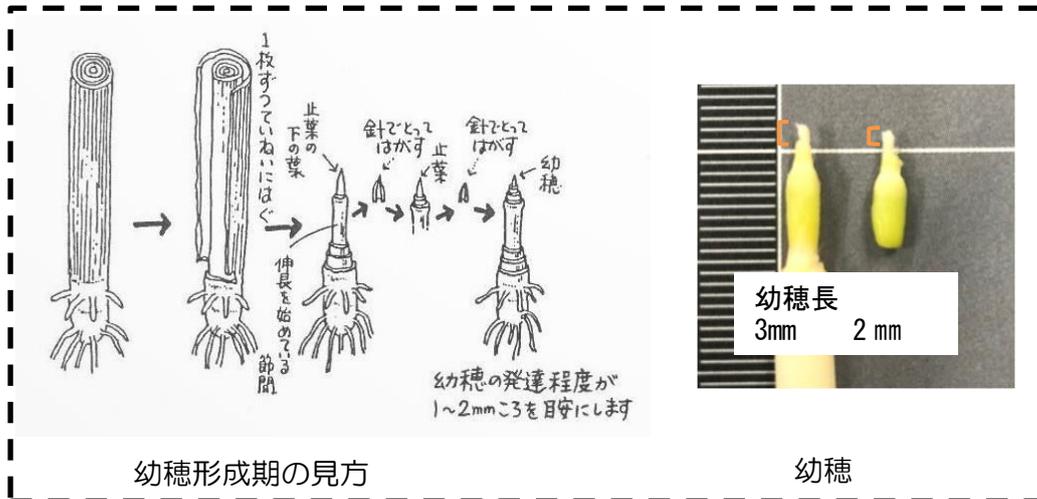
(7) 落水時期

- 完全落水は出穂後30日以降とする。
（入水できなくても水口を止めておく）

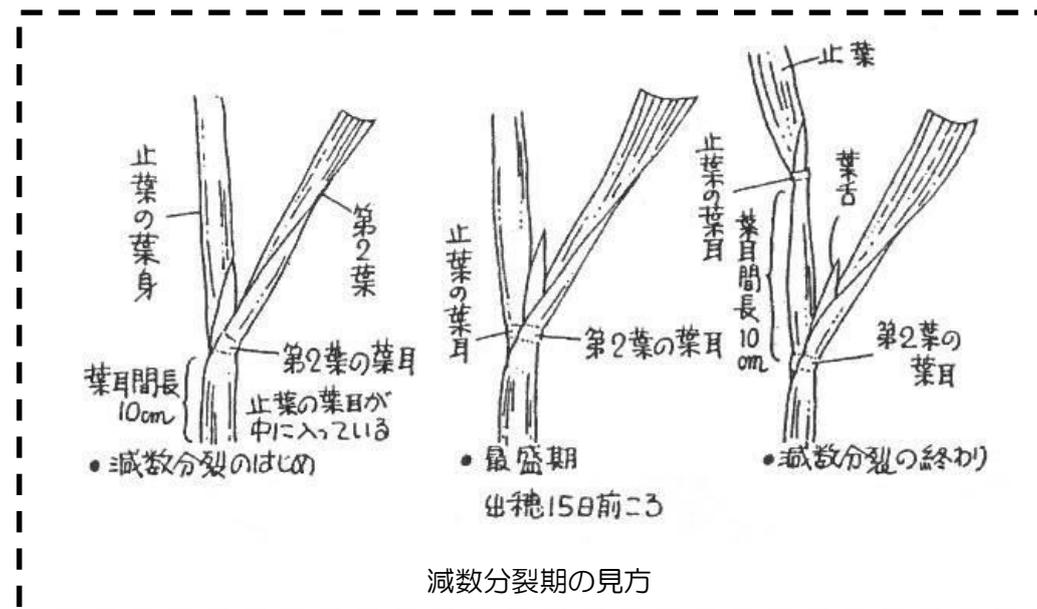


10 生育ステージの見方

(1) 幼穂形成期



(2) 減数分裂期



(3) 出穂期



出穂期

穂先が茎から出ている状態のことを「出穂」と呼ぶ。

このような出穂が水田の40～50%見られる状態を「出穂期」、80～90%見られる状態を「穂揃期」という。

表 5月22日移植した場合の生育ステージの目安（平成30年～令和4年調査）

生育ステージ	月日
幼穂形成期	7月16日頃
減数分裂期	7月27日頃
出穂期	8月5日頃

（調査地点：雫石町）

11 追肥

- 追肥は幼穂形成期頃（7/13～18）が重点
追肥時期が遅れないように注意する。

10a 当たり窒素 2kg 程度

(例) NKC17号：10a 当たり 10～15 kg
硫安：10a 当たり 10 kg

※追肥時期、追肥量の詳細は指導会で伝達します

早めに追肥することで、玄米タンパク質含有率の上昇を抑え、収量の向上が期待できます。

12 病害虫防除

(1) いもち病

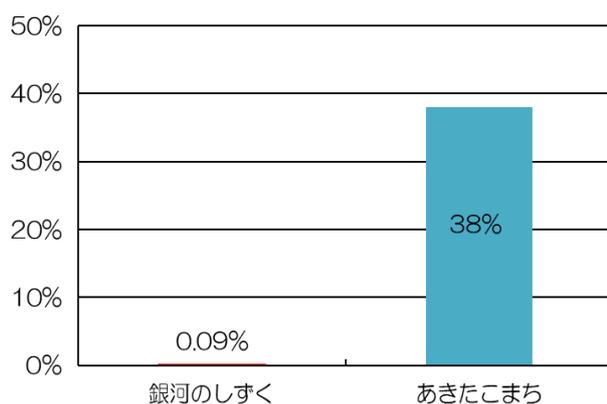
いもち病防除をしました

いもち病は減収要因となります

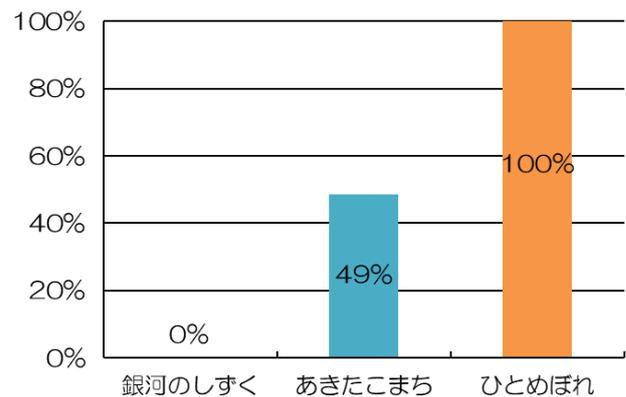
- 葉いもち防除を徹底する。
- 箱施用剤を施用した場合は、穂いもち防除は省略できる。
※いもち病の常発地では、穂いもち予防防除も実施する。
- いもち病の発病が見られたら、ただちに治療効果がある薬剤を茎葉散布する。

○ 「銀河のしずく」の穂いもち抵抗性について

- 令和2年度は、いもち病が多発生した。
- その中でも、「銀河のしずく」は、いもち発病穂率が0だった。



いもち発病株率（7/30 調査）



いもち発病穂率（9/1 調査）

防除概要（調査地点：一関市室根町）

葉いもち防除 5/28 育苗箱施用剤 穂いもち防除① 7/20 水面施用剤

※「ひとめぼれ」と「あきたこまち」はいもち病の発病が見られたため、8/5に追加防除を実施。

(2) 紋枯病

- 代かき時に水尻や畦畔沿いに集まったゴミ（前年の刈株残さ等）をすくい取る。
- 宿主となる雑草（ノビエ、カヤツリグサ等）の防除を徹底する。
- 窒素多用を避ける。
- 薬剤防除をする。



紋枯病（宮城県古川農業試験場 宮野氏提供）

(3) 斑点米カメムシ類

ア 耕種的防除



本田内、畦畔の雑草の管理を徹底しました。

- 本田内の雑草（ノビエ、カヤツリグサ等）が出穂しないよう防除を徹底する。
- 畦畔雑草は、適期に草刈り（除草剤散布）する。

重点管理時期：6月上旬（カメムシふ化盛期）

7月中下旬（水稻の出穂 15～10 日前）

イ 薬剤防除



適期に薬剤防除を実施しました。

- 重点管理時期：1 回目：穂揃い期 1 週間後（8 月中旬）
2 回目：1 回目散布の 7 日後

※薬剤の選択は指導資料を参考に選択すること

13 適期刈取り

適期に刈取りしました

- 下記の「刈取り適期の判断」を参考に、刈り取り時期を判断する。
- 生育ムラや倒伏、病害虫の発生等により、成熟状況が大きく異なる部分がある場合は、刈り分けを行う。

適期より遅いと白未熟粒や胴割粒が増加し、品質が低下します。またたんぱく質含有率が上昇することがあります。

刈取り適期の判断

○積算温度によるチェック

- 出穂後の積算温度は、「950～1050℃」。
- 時期が近づいたら、籾の黄化やテスト籾すりで刈取り時期を判断する。

○黄化籾割合のチェック

- 平均的な大きさの穂を観察し、黄化した籾が1穂籾数に占める割合を確認する。
- 刈取適期は、「黄化籾割合 80～90%」（80～90%の籾が黄化、10%程度が緑色の状態）。

○テスト籾すりによるチェック

- 黄化籾割合が 80～90%に達したら、数穂を試しに籾すりをする。

14 乾燥

- 籾の乾燥は二段乾燥を実施しましょう。

急激な乾燥や過乾燥は胴割粒の発生要因となります

15 秋耕起・土づくり

(1) 堆肥、稲わら等の有機物の施用

堆肥または稲わらを施用しました

- 稲わらのすき込みは収穫後できるだけ早い時期に行い、腐熟促進資材を散布する。

腐熟促進剤の施用量

石灰窒素

20 kg/10a

保肥力が向上し、安定した収量を確保できます

稲わらを十分に腐熟させることでガスわきを抑え、初期生育確保につながります

- 稲わらと土が混和する程度、ロータリー耕を行う（耕深 5～10 cm を目標）。

(2) ケイ酸質資材の施用

ケイ酸質資材を散布しました

いもち病の軽減、根腐れ防止のほか、葉が直立して登熟が向上するので、品質の向上につながります

- ・ 秋に散布する。秋に散布できなかった場合は代かき1か月以上前に散布する。

ケイ酸質資材の施用量

ケイカル 10a 当たり 100~200 kg

16 栽培管理記録簿

- ・ 収量・品質と栽培管理の関係を検討するので、別途配布する栽培管理記録簿（計画）に栽培管理を記録してください。
- ・ 皆様の記録簿の一枚一枚が、研究会の貴重な財産です。

17 事故の防止

- ・ 一緒に農作業にあたる家族、従業員に徹底し、事故防止に努めましょう。

〈 盛岡地域版銀河のしずく栽培マニュアル改訂記録〉

令和6年1月

- ・ 盛岡地域版銀河のしずく栽培マニュアル 発行

令和7年2月

- ・ 水稻一発 N25 の施用量を掲載
- ・ 登熟期の水管理（飽水管理）を掲載